

研究会「アクチノイドメスバウア分光の展望」を開催

アクチノイドメスバウア分光研究グループ

佐伯 正克

アクチノイドメスバウア分光研究グループの主催で、上記研究会が1994年1月31日に、東海研究所第5会議室で開催された。

伊達センター長の開会の挨拶に引き続き、日本原子力研究所の大先輩である大阪大学名誉教授藤田英一先生（現静岡理工科大教授）から、「アクチノイドメスバウア分光に期待するもの」との演題で、次頁に転載したような自筆の絵を織りまぜつつ広い視野からのお話があり、会場から堅苦しさが消え、討論し易い雰囲気となった。次いで、アクチノイド溶液化学の側面から、東北大学の朽山修先生に御講演いただいた。更に、放射光利用の可能性を探るべく、大型放射光施設開発室の原見利用系開発グループリーダーから、放射光によるメスバウア分光に関する現状を解説していただいた。

その後、筆者及び当研究グループの研究囑託をお願いしている先生方から、当グループの研究のねらいとその背景や周辺分野について紹介し、萩原次長の挨拶で締めくくった。

参加者は予想を越えて40名以上に達し、外部からも日本放射光学会会長の菊田惺志東大教授を始め7人の参加者を得、和やかな中にも活発な討論を行うことが出来た。

アクチノイド（当グループでは超ウラン元素と同意で使用している）は言うまでもなく、核燃料サイクル

Research Meeting on Prospect of Mössbauer Spectroscopy on Actinide Compounds

Masakatsu SAEKI

Reserch Group for Mössbauer Spectroscopy of Actinides

から供給されるものであるが、我国では核燃料サイクルに関する研究、或いはその一部としての消滅処理や、廃棄物処理に関連した研究が行われているに留まっているとって過言ではない。当グループが対象とするアクチノイドは主に、ネプツニウムからアメリシウムであるが、核燃料サイクルを離れて、純粋に科学の対象としてこれらの元素と付き合ってみたい。その結果としての成果が核燃料サイクルに何らかの役に立てば、更に結構である。研究会で皆様からいただいた貴重なコメントを今後の研究に生かして行く所存である。そして出来れば、国内で研究用の超ウラン元素を調達可能な機関を設立しよう、というような気運が生まれてくるほどになったらと夢見ている。

〈藤田先生による絵の解説〉

私は修業時代に、金属物性分野から核物理を垣間みて、素晴らしい眺めに魅せられ、メスバウア分光を始めました（図1）。一方、メスバウア博士自身のように核物理の人が金属の分野を覗き見て、大いに啓発された場合もあります（図2）。何れにしろ垣根のために、他分野に驚きと興味を感じる機会は少ないようです。原研は本来両分野の垣根がなく、今回の話題の分野を拡大するのに最も適した場所でしょう。

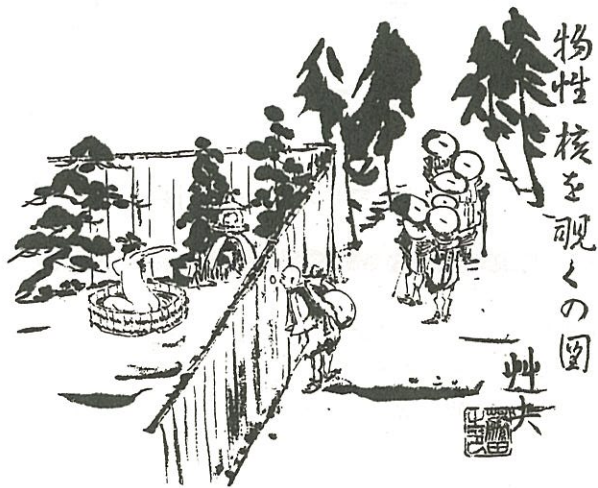


図 1

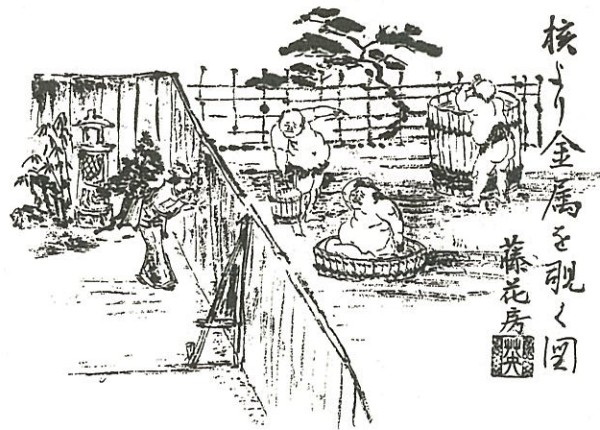


図 2